

Title	第3回 「健康ってなぁに?: ヘルスとウェルビーイン グの原点を探る」
Author(s)	森本, 早紀
Citation	目で見るWHO. 2021, 75, p. 5-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 第3回「健康ってなぁに?:ヘルスとウェルビーイングの原点を探る」



大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻(2021年度入学予定)

## 森本 早紀

大学時代に医療人類学、国際保健に興味を持つ。卒業後、看護師 として病院等で勤務し来年度より大阪大学大学院人間科学研究科 に入学予定。

## ヘルスとウェルビーイング

1948年のWHO憲章の前文で初めて、「ヘルス」と「ウェルビーイング」について述べられました。それから72年、COVID-19によって社会と個人の変革が求められる今、もう一度ヘルスとウェルビーイングについて考えていく必要があるのではないかと思います。

今回はまず『等身大の<わたし>から みたヘルスとウェルビーイング』と題し 熊谷晋一郎さんにご登壇いただきました。 周りからも自分からも理解しにくい苦労 を抱えた当事者による「等身大のわたし」 を探求する当事者研究とウェルビーイン グの関係についてお話いただきました。 自分の努力で変えられる部分と変えられ ない部分を分析し理解した、わたしだけ の「からだ」と、わたしだけの「物語」 が、「わたし」を形作っています。自分 の身体を調教するのではなく、それを認 めた上での社会変革が重要であるとされ ました。そして、自分だけの「物語」に は類似した仲間の存在が必要となります。 具体的なエピソード記憶と抽象的な概念 的自己の2つで形作られるわたしの「物 語」は自伝的記憶と呼ばれます。様々な 状態により自分のエピソードを誰とも分 かち合えない時、この具体的記憶と抽象 的記憶が統合されにくい状態に陥ります。 仲間同士で経験を分かち合い、語り合え る場を持つことで自伝的記憶を紡ぎ、そ れぞれのウェルビーイングに近付いてい きます。また、自伝的記憶はウェルビー イングだけでなく連帯、実践理性、創造

・想像力に深く関わっているということをお話いただきました【図1】。ウェルビーイングとは等身大の「わたし」すなわち、等身大の「からだ」と等身大の「物語」を築き上げることであり、そのためには仲間が必要であると結論付けられました。

次に『医療人類学からみたヘルスとウ ェルビーイング』と題し、池田光穂さん にご登壇いただきました。医療人類学と いう枠組みから考えた課題の一つとして、 ワクチン開発への期待のように医薬品へ の依存やドラッグの利用が個人や社会そ のものを病気にしている現象があります。 人々が気に病むことで実際に病気になる のではないかとした上で、グローバルハ ームリダクションの必要性を訴えられま した。また、以前から指摘されていた様 々な問題が COVID-19 の流行により背 景化されてしまっていることも課題の一 つであるとされました。COVID-19の 蔓延によって、遠隔医療が必要視されて います。僻地に住む人々とどのようにコ

ミュニケーションをとり、どのように健康格差を縮小するのかについても課題となっていると話されました。特定の地域やコミュニティに関する知識や世界中のデータ比較ができること、多角的な研究方法などがグローバルヘルスに対する医療人類学の強みであると語っていただきました。

## 改めて問い直す ウェルビーイングとは

パネルディスカッションではお二人の話題提供を受け、ウェルビーイングにおける等身大の自分と他者との連帯や仲間の重要性、人間のもつ潜在能力をどう伸ばしていくのかというディスカッションが行われました。池田さんがウェルビーイングの日本語訳を「それなりにハッピー」と提案されたように、100%の幸福を追い求めるのではなく、等身大のわたしと社会について、様々な観点から考えていきたいと感じています。

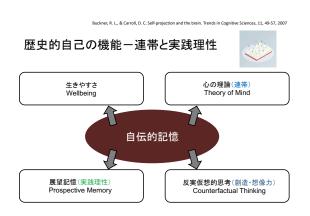


図1 歴史的自己の機能(熊谷さんの資料から)